

『源氏物語』にみる物語論理

——女三宮降嫁をめぐる——

松 田 薫

女三宮降嫁をめぐる従来、一部世界から二部世界への暗転という主題性の転換に要請された夾雜物的存在としてのみ女三宮が捉えられ、女三宮自体の本質的意義は見過ごされているらしいがある。

降嫁経緯には女三宮も光源氏も登場せず、両者が概念として語られ曖昧な叙述が目立ち、ぼう大な文量を費やして明確な原因は語られぬまま光源氏に降嫁が決定してゆくという一種不可思議な物語展開が見られるが、降嫁の必然性はどこから起こってくるのかについて、つまり光源氏側からと女三宮側からの積極的な原因が究明されるべきであろう。拙稿では特に前者に焦点を当て、さらに若菜巻に至る迄の物語展開のあり方の特徴を検討し、それが若菜巻でどのように発展しているのかを論じてみたい。

杉山康彦氏は「婿は光源氏のほかにはないという読者の予感なり、確信なり」の生み出される原因を文脈より分析し、朱雀院の言葉の矛盾や「意識の断続がかえってその間に意識の底流における連続を

表現している」、「光源氏を婿にということは朱雀院の無意識の深層にひそんでいる」と結論している。が、「矛盾や空白」をあえて「無意識の深層」としてまで個の中に還元し説明してしまうことはいささか合理主義的すぎて、かえって物語の不透明さを印象づけているのではないか。

若菜巻冒頭の「矛盾や空白」はこれまでの物語を貫いてきた論理からこそ採られるべきであるし、女三宮降嫁承諾の原因も光源氏の存在の本質にかかわるものとして、物語始発部の臣籍降下から検討されるべきであろう。

一、朱雀朝の弱体性

女三宮降嫁をめぐる、桐壺巻に端を発する第一皇子朱雀院側と第二皇子光源氏側の確執が、再び呼び起こされているのではないか。

(1) 立后事情と『源氏物語』の王朝

石津はるみ氏は、史実の立后事情を検討した上で『源氏物語』の中に「中宮のいることが安定した後宮を印象づけ、ひいては安定した治世をも立証するという観念」や「中宮を欠いた王朝は帝、后完備した王朝に比べ虚弱で不完全なものとする観念」を認めている。しかし「安定した治世」、それに対しての「虚弱で不完全なもの」とは一体どのような状態をいうのかについて厳密さを欠く。また立后と「安定した治世」とは合致するものなのか。たとえそうだとしたとしても、史実の王朝の実態と『源氏物語』中のそれを単純に同次元で比較するのではなく、その「観念」が『源氏物語』の中でどのように独自のものとして機能しているのかという史実と物語文学の関連や差異の問題こそ追究されるべきである。

今一度、史実の立后事情を検討すると、桓武朝から後一条朝に至る十九王朝における立坊、立后状況は一樣ではない。立坊でさえ石津氏の指摘する「原則的に不可避」^④というわけではないことは、たとえば五十五歳で即位した光孝帝の場合に示されている。また立后なき状態の連続した仁明朝から宇多朝に至る九王朝は、藤原氏北家嫡流の権力志向が如実であり、皇系と藤原氏の相互依存に存在する権力の実態は確かに天皇の「安定した治世」を示すものではないだろう。

しかしこの状態は以後の王朝にも見のがせない。なぜなら石津氏が「安定した王朝」の代表とする醍醐朝の穩子立后の背景にも藤原氏の策動が窺え、続く宇多朝についても「摂関制ではないが、後宮政治を経過した後であり、基経の権力は摂関同様である」^⑥といわれ、また天曆時代、村上朝についても「天皇親政の久しく続いた村上天皇朝はその廟堂の主導権を忠平流藤原氏にゆだねつつも、藤原氏と賜姓源氏との均衡状態の上に成立していた」^⑦といわれることなどは、史実上特に厳密な意味での親政という形態による治政の安定はなかったことを示すからである。ただ「立后の有無は立坊とは次元の異なる問題」つまり「ある時には天皇である夫の、またある時には次代の天皇への可能性をもつ皇子の権威づけに貢献させられる点」を内包するという石津氏の指摘は正しく、重要であるといえよう。

そこで『源氏物語』の王朝について考察すると、やはり中宮不在の状態に注目せざるをえない。以下四代王朝^⑧を検討してみる。

(1) 桐壺朝は摂関制とも親政とも明示されていないが、特に桐壺巻では摂関体制下の後宮を思わせるかのごとく、桐壺帝が右大臣家方に大きな配慮をほどこしていることは認めうる。また、中宮不在の状態が次の立坊の不確実性を色濃くしているともいえる。最終的には桐壺帝が第一皇子を立坊させるが第一皇子の母弘徽殿女御を中宮とはせず、後の冷泉帝(第十皇子か)の母藤壺女御を立后させてゆ

くが、藤原氏の娘に庄倒されて内親王の入内や立後の例が稀少であった史実を考えたとき、皇族出身の藤壺(先帝の四の宮)を立后させることの特異さと、桐壺帝がいかに強く冷泉帝の即位を願望したかが窺える。しかも、立坊や立后に関してほぼ同時に帝自身の意志が貫かれるという点は『源氏物語』の独自のものといえる。(2)冷泉朝での秋好中宮の立后は、冷泉帝自身より後見である光源氏の力によるものであり(1)と全く同次元で扱いきれぬが、皇族出身者の立后がうち続いたことを世間が非難する叙述には、歴史事情の反映以上に作者があえて源氏系の立后を描くことの強調の意が窺える。また秋好中宮自身が後に回顧するように、御子なくしての強行のきらいのある源氏系の立后であったという点にもやはり独自性がある。(3)朱雀帝皇子(承香殿女御腹)朝での明石中宮の立后も次代の立坊を確固たるものにするための源氏系の立后と考えられる。

以上、(1)(2)(3)は一樣には扱えぬが『源氏物語』の立后事情は史実に対比しても特異である上、いわゆる親政という形態での安定の実現などでもないことがわかる。そしてこの三王朝に比して、中宮不在のまま終わった朱雀朝はやはり対照的である。この原因は帝の個人の意志や願望の強弱に求められるものではなく、より本質的な差異にあるのではないか。

(1)について今井源衛氏は「古代律令制そのものではなく作者の頭

『源氏物語』にみる物語論理

の中のみ存在しえた理想の時代」と捉え、(2)について光源氏と藤壺による秋好中宮入内の策略を含めて、秋山虔氏は「時代設定を撰関時代以前の天皇親政時代としながらも、作者の生きている現代が汲みあげられている」、「対立矛盾すべき時代を重ねあわせることによって現実世界のはらむ問題を批判的に形象するという方法として注目すべきだ」と捉えている。また清水好子氏は、光源氏の臣籍降下を「臣下として政治の實際にたずさわる道を開いた」こととして重視し、それと関連させ(2)について、当時道長ら撰関家自身が「方法として纏って頭に浮かべていない」「撰関政治というものを意識にのぼせ、概念化し方法としてのそれを自覚した」『源氏物語』の独自性を評価する。

しかし秋山氏が(1)と(2)を「対立矛盾すべき時代」と捉えるあり方に顕著なように、これらの見解は物語を部分部分に分断し、直接に歴史社会状況と結びつけすぎているだろうか。むしろ歴史をふまえた現実認識より生み出された虚構としての物語文学の有する独自の論理を、つまり各王朝を総合的に捉えてそれぞれがなぜそのように描かれるのかという連関を探ってゆくべきである。清水氏の指摘は紫式部の現実認識を探る上で重要だが、臣籍降下を政治的な意味でのみ捉え、作者の現実認識と物語創造とを直結しすぎている点で今井氏、秋山氏と同様であらう。

(2) 尚侍朧月夜の意義

朱雀朝が桐壺朝、冷泉朝との本質的差異として具体的にどう弱体であるのかについて、立後の可能性の強かったといわれる尚侍朧月夜に焦点を当ててみてゆく。

まず、従来不詳というかたちで見過ごされがちな「尚侍」の意義を史実より検討し概括すれば以下の四段階になろう。^{①②③④}

①名実共に実務的に機能していた時期、②専ら帝の寵愛の対象として名目上の尚侍と実務中心の尚侍との併任が出現する時期、③兼家から道長へのより確固たる摂関体制のあり方と呼応するかたちで皇妃への可能性を孕みつつある過渡的な段階（藤原綏子の場合）④道長が三、四女を次々に皇妃への進路として尚侍就任させた時期。ここで注意すべきは、①②は帝からの寵愛が特異であった登子の場合を除いて、全て藤原氏の後宮での権力掌握のための画策の一環であり、尚侍は皇妃でも皇妃格でもなく、基本的には官女であったことである。

『源氏物語』の尚侍朧月夜に関して、従来の後か后でないかという論争に対し、後藤祥子氏は歴史社会的側面での尚侍の実態を見究めた上で、なお存在する尚侍朧月夜の曖昧さを指摘し柔軟性をもった解釈をしている点で優れている。つまり光源氏と朧月夜との密

会露頭に際し「結婚問題では自由な立場におかれていた筈の尚侍」が怒りをかうことに注目し、そこに父右大臣の野心を捉え、事実上の④の段階における過渡的な意味で尚侍のもつ曖昧さが物語にも反映したのだと解釈する。

しかし冷泉朝における玉鬘の尚侍就任はその実務的機能を重視されたものであり、尚侍朧月夜との併任の形態をなしており、同じ尚侍でも両者の形象の意義は異なっている。ゆえに作者は特に朧月夜に関しては、皇妃への可能性を持ちつつあるが官女にすぎぬという曖昧さを物語の中で独自の意義を担うべく附与したという意義であり、当時の歴史社会が写実的に捉えられているという意味での反映だと短絡することはできないと思われる。

そしてさらに注意すべきは、密会露頭時の右大臣と弘徽殿大后の反応の微妙な違い、とりわけ後者の怒りの激しさである。これを無視して両者を「右大臣家」として一括し歴史上の摂関家の様相と直結してはならない。

この両者の会話について、後藤氏と鈴木日出男氏は詳細に分析し、弘徽殿大后の言葉に、光源氏に対する「嫉妬」「憎悪」という感情の比重の大なることを指摘し、それが光源氏を朱雀帝への謀叛心を抱く者だとする「公憤」「政治的野望」に連続してゆく過程の論理の不明確さを指摘しているのは重要である。

が、しかしその短絡的現象の原因については、後藤氏は「説得力」として「逆上した言葉のエネルギー」に求めていること、また鈴木氏は「物語が政治的要素を持たないということではなく、作中人物の諸々の感情がきびしく相対化されるときにはじめて人物の意識の背後に顕現してくるという関係」の上に立った「人物造型の方法」に求めていることには問題が残る。即ち「言葉のエネルギー」なるものはどこから生まれてくるのか、なぜ要請されてくるのかこそ明確にされるべきであるし、「感情がきびしく相対化されるとき」とは一体どんな時なのか、なぜ須磨流謫前後に「政治的要素」の具体性に欠くような物語展開があるのかなどが、物語総体の中から解明されぬ限り、有効な説とはいえないのだ。

弘徽殿太后の怒りの本質は、単に個人的な心情や朱雀帝を思う親心ゆえの嫉妬といった次元を超えた、光源氏への敵対心と見るべきではないか。これは桐壺巻での立坊をめぐる第一皇子と第二皇子の抗争以来、弘徽殿太后に一貫した姿勢、位相なのである。光源氏が政治的に有力な存在であるゆえに謀叛へと短絡させ失脚を謀ろうとする背後には、弘徽殿太后の言葉として明確に述べられてはいないが、政治的側面で脅威である以上に現実世俗秩序にとって脅威であるという光源氏の優越性への察知の論理が貫かれている。弘徽殿太后という存在をえて言葉の論理に不確かさを呈しつつも激怒

『源氏物語』にみる物語論理

させ、「言葉のエネルギー」を要請するものは、光源氏という存在を否定しようとする方、逆に言えば光源氏の優越性を確認してゆくという「物語の論理」の働きたといえよう。

朱雀帝は臘月夜と光源氏の関係には寛大な態度を示し、臘月夜は官女であるゆえに殊さら咎める必要もないと判断していることは弘徽殿太后の激怒を一層異常なものとして印象づけると同時に、皇妃への可能性を持ちつつあるが官女にすぎぬという曖昧な尚侍臘月夜の意味は他ならぬ朱雀帝の判断によりその可能性を喪失してゆくところには、そう判断せざるをえない朱雀帝という存在の不可解さをも浮かびあがらせている。

事实上「素腹の后」といわれた円融朝の遵子立后の例もあり、『源氏物語』では後に秋好中宮が御子なくして「あながちに」立后を成就させられたことを考え併せたとき、朱雀朝後宮で他の皇妃より寵愛の深かった尚侍臘月夜を御子はなくても、皇妃への可能性を孕みつつあるという曖昧さを発展させるかたちで、曖昧さがあるゆえに帝の強力な意志で物語において立后を成就させることは全く考えられぬことはないだろう。しかし朱雀帝にはたとえ桐壺帝に貫かれていたような強力な意志や独自の資質は附与されていないといわねばならない。ここに弱体性の主因がある。

光源氏の須磨流謫から帰京への物語の流れと平行して、故桐壺院

が朱雀帝の夢に現われた後、この須磨流謫の意味を逆転させる啓示が働いたかのごとく、朱雀帝は光源氏が「まことの犯しなきにてかく沈むならば、必ずこのむくい有りなむ」と悟り、召還と官位の復帰の御意を下し、讓位を覚悟するに至る。この朱雀帝の行為は「朱雀帝は右大臣方にせよ左大臣方にせよ、強き意志の中にあつてその弱き意志の行き場を失っている」という理由によるのではない。この召還の御意や讓位への決心に際しては、弘徽殿太后でさえもあわて動揺するばかりで何ら事態を変更させる意志も力も持ちえなかつたわけであるから、その場その場の言動から人物の性格としての意志の強弱を把握することは物語においては適當ではない。近代小説における人物の個性や人格を捉えてゆく方法は、『源氏物語』には有効とはいいがたいのである。

朱雀帝の思いには躑月夜への情愛面においても光源氏にはかなわないという絶対視と、やはり光源氏の身分は臣下なのだという意識が表裏一体となっている屈折した抵抗が窺えるが、それは効力を持たない。朱雀帝が光源氏の優越性に屈服する存在なら、弘徽殿太后はその優越性を否定しようとする、より積極的な存在としてあるのであり、両者ともに光源氏との対照を通して弱体であるゆえんが語られてゆくという光源氏と朱雀帝方の相関に「物語の論理」を見るべきではないか。換言すれば、弘徽殿太后は光源氏の須磨流謫への

間接的原因をもたらし、光源氏を負の方向に追いやるべく機能する存在であり、それを復帰という正の方向に逆転させるべく最終的に機能したのが朱雀帝という存在であり、両者の機能の方向は異なるが、光源氏の優越性の存在論理を明確にするという点では同次元であるということになる。

また尚侍躑月夜の持つ曖昧さは、朱雀帝方の弱体性を強調してゆくとともに意義をもつたように、一見不明瞭ではあるが背後に光源氏の優越性の存在論理を確認してゆく方向に強く働く「物語の論理」に呼応した造型となつている点で、史実の尚侍の過渡的な意味での曖昧さ(8)からも独自のものでありえている。そして朱雀帝の弱体性はそれが最もよく象徴されるかたちで結果的に中宮不在の状況がもたらされるのであり、中宮不在だから即ち弱体だと判断されるべきものではないのである。

女三宮降嫁をめぐる、他の婿がねを全て「ただ人」であるゆえに不足とし、臣下であるにかかわらずそれらと超越した存在としての光源氏が選ばれてゆく過程は、光源氏を「ただ人」とする思いと「光とはこれをいふべきにや」という絶対讚美とが表裏一体となつた朱雀院の屈折した抵抗意識が過去の重みを背負って語られる過程であり、光源氏の優越性を確認し、相関的に朱雀院の弱体性を確認

してゆく「物語の論理」が朱雀院という個の心情を超えて働いてるといえるのではないか。

一、光源氏の存在論理

朱雀朝の弱体性を弱体性として対照的にあらしめている光源氏の優越性とは一体何か。これは桐壺朝の特異さとも関連するであろう。

(1) 存在論理としての「一世源氏」

まず光源氏という一世源氏と史実上の一世源氏との差異に触れておく。光源氏は限りなく皇位に接近しつつ皇位に即くことはなかった。史実上、一旦臣下に下った者が再び即位した例は少なくない^②。では史実の一世源氏と帝位とはどのような関係にあったのか。玉井力氏は

「源氏賜姓は皇子を直接に皇位継承権をもつもの（親王）と一段と低い条件をもつもの（源氏）とに区別し、両者の役割りを明確にした」もので「女御はこれと深くかわりつつ寵愛を賜姓者の母達から区別するための称号として、更衣はそれ以外の『キサキ』の称号として設定された」。「嵯峨朝後宮は仁明を擁する皇后橘嘉智子を頂点として、妃、夫人、女御、更衣、そして更衣が親王の母と源氏の母というように皇位継承の序列にしたがって幾段階に

『源氏物語』にみる物語論理

も分けられるに至ったのである」。

とし、さらに「光源氏の母が更衣であったのはむしろ当然であったともいえよう」と附言している。また、村井康彦氏^③

「撰関盛期、紫式部のころには更衣といっても身分の低い家筋の出とは限らなくなるにもかかわらず更衣所生の皇子は賜姓されることはあっても皇位に即くことはないという認識はもたれていたように思われる。光源氏の母は更衣でなければならなかったのである」

と、一層史実と光源氏の臣籍降下という結果との整合性を強調している。両論は『源氏物語』で第二皇子がなぜ源氏とされたかという桐壺巻での緊張感を読みとらずに、臣籍降下されたことを前提として、それが結果的に正しいことを歴史の側から証明したにすぎない。

確かに母桐壺更衣の出自、後見が弱いために、皇子の将来が危惧されるゆえ立坊しえない事情も含まれてはいるが、それが臣籍降下を決定づけたのではない。光源氏の資質がいかに第一皇子を凌ぐ、超世俗的な「ゆゆしき」^④までのものが強調され、帝位に即けば「乱れ憂うること」が起り、かといって普通の臣下にはとどまらない^⑤、というその不可思議な運命に対する桐壺帝の恐れや察知が働いて、やむなく寵愛する第二皇子を源氏と為したのである。皇位に即くことを超えているような資質と同時に即位しえない断念が示さ

れていることで、なにより史実の一世源氏とは異なる。一世源氏は光源氏の単なる「属性」^⑧や附与された一条件なのではない。この臣籍降下の様相に光源氏の存在論理をみるべきだろう。またそれは彼の資質が超世俗的であるにもかかわらず、宮廷社会で生きぬくための基盤として左大臣家の娘と結婚し、左右大臣家の抗争というきわめて世俗的政治的な問題にまき込まれることを余儀なくされていることから窺える。

皇位への緊張感とともに「世俗的秩序や通念にとつて脅威でありながら実際には世俗的秩序を領略することができない。むしろそうであることが超越的な価値である」という両義性を光源氏の存在論理として「一世源氏」の中に認めておく必要がある。

清水好子氏^⑨は「皇位継承に関する「準太上天皇の位を極める」「栄華コース」の構想を前提とし、「血統の上からいってかかる運命を歩む主人公は源氏でなければ具合わるいことになる。しかもできるだけ皇統に近いものとして一世の源氏が求められねばならない」と説くが、準太上帝という位は栄華の象徴にすぎぬのであり、作者は不可思議な予言の種明かしのために物語を書いているのではない。むしろ予言の不可思議さはそのまま底流し、光源氏の存在論理とかわつているものと見るべきではないだろうか。

また藤壺との犯しの結果としての冷泉帝即位についても、「冷泉

帝は不義の子というものの血統においてはいささかの不純もない」^⑩とかたづけられてしまつては、殊さらに犯しが描かれる物語の根幹に触れる問題の解明にはならない。この犯しが描かれることと併せて、一世源氏を主人公とした積極的な意義、つまり独自の「一世源氏」像を形象しなければならなかった作者の情動を探るべきであろう。紫式部がおそらく自らは預り知らぬ皇位継承問題に、否それをめぐる緊張感になぜ一つの焦点を当て物語の骨子とするのかという、血統や階層の問題を超えた物語文学創造の謎の解明にとつて、存在論理としての独自の「一世源氏」の意義を見おくことは無意味ではないと思われる。

(2) 藤壺との犯しの意義

光源氏と藤壺の犯しをめぐつては、その罪がいかなるものか幾つかの論争点があるが、今その問題には触れず、藤壺との犯しと直後の夢、そして藤壺立后と冷泉帝立坊への物語展開を中心に、そこに光源氏の存在論理がどのように浮かびあがるかを考察したい。

犯しについて罪の観点から考察することは重要だが、同時にこの犯しは一元的に捉えられないという点にも注意すべきである。つまりいわゆる密通^⑪といわれているものと、その時藤壺が懐妊した御子が即位してゆく段階とがあり、この、皇統譜侵犯へ発展してゆくこ

とが特徴なのである。極言すれば、この犯しは御子懐妊のためにこそ描かれるのであるといえる。ゆえに藤壺との密会が若紫巻以前にあつたかなかつたかという問いは無意味であろう。

さて、その懐妊についてであるが、藤壺の懐妊の証しやそれが光源氏の御子であるという証しは地の文では語られていないことを清水好子氏^④と永井和子氏は詳細にたどった。「光の夢を信じる主観」と紅葉賀での光源氏の異例の加階に窺える「具体的な宮廷の地位や声望に支えられた客観」の両面から「天子の父」にふさわしい準太上帝への道を歩むべく確固たる光源氏像が描かれてくると清水氏は捉え、御子誕生以後には光源氏は「畏怖や疚しさを感じる」より「運命に対する感動」が強くなると指摘する。また永井氏も「天啓」である「源氏の夢こそがこのすべてを説明しつくす」とする。

しかし、ここで人物の主観なるものをどれほど明確に読みうるといふのであろうか。杉山康彦氏が光源氏の思惟については先の二者の論同様に、夢を「自分の意図を超えたもの」「ひとつの宿世」として重視し、光源氏が自分の御子懐妊のことを判断してゆく「基層」なのだということには賛同しきれぬが、同氏の藤壺の意識への考察のし方は重要である。

「あさましかりしとかいかならむとかあやしと思へどというあいまいなことはの含む両義性を読者が意識下に読み解いていく、そ

『源氏物語』にみる物語論理

れがそのまま藤壺の深層のおそれと疑いを表現する」

と、杉山氏は文体を分析し文章の拮抗、接続関係と主体の意識及び読者の意識とを同時進行的にかかわらせて、そこで何が語られてゆかかを説こうとする。物語の人物の「深層」を論じる点は賛同しえぬところだが、叙述の曖昧さを曖昧さとして見直し、それがどういう意味かを考察する方法は重要だといえる。そしてこの方法は光源氏の意識への考察の場合にも応用されるべきであった。即ち、予言をプロットとしてそれにふさわしい夢の内容を推定したり、夢を検討する必要もないというほど絶対視したりすることは回避して、やはり夢の曖昧さをそのまま認めるべきではないか。

この若紫巻の段階では光源氏の見た夢と藤壺の懐妊とは明瞭な意味としてまだ結びついてはこないものであり、紅葉賀巻の状況を重ね合わせることで初めて結びつくのではないか。光源氏と藤壺の視点、言動に加えて桐壺帝のそれにも注意する必要がある。

桐壺帝が光源氏と誕生した御子の相似について「『兄弟だから』とは思わずに『並びなきどち』が似るのだと思うように叙述されている」^⑤ことや、光源氏と御子に「同じ光」を認めていること、そしてその後光源氏の心情が「恐ろしいも、かたじけなくも、嬉しくも、あはれにも、かた／＼移ろふ心地して涙も落ちぬべし」と語られることは何を意味するのであろう。この心情は「畏怖や疚しさ」

或いは「原理的に『罪の意識』としての意義を担いえている」「おほけなし」という「親密な間柄において、その親密さ故に抱かねばならなかった他者に対する自己の非なることの意識」^⑧では捉えきれぬものである。またこれを「天子の父に近づく一步として」「おのが将来に期待をもつ」ゆえであるとするにも無理がある。これを単独で扱うのではなく、

「源氏の君そっくりであるという発見が、立場なしえなかつた源氏の君のかわりに若宮の立場をくわだてる帝の決意へとつづいてゆく」^⑨

として桐壺帝の判断に重ね合わせてゆくことが重要であることを強調したい。

物語には桐壺帝がここで、この若宮をすぐ立場させようと言ったので光源氏は「嬉しくも、あはれにも……」^⑩と思つたと書かれていないし、また光源氏がやがて桐壺帝はこの若宮を即位させるおつもりだろうと推測したので「嬉しくも、あはれにも……」^⑪と思つたと書かれてはいない。藤壺にしても然りである。明確に人物の心情や意図の交換は描かれず、この曖昧さがむしろ緊張関係を生み出し、物語を展開させてゆく力、^⑫物語の論理^⑬を形成してくるのではないか。

この犯しの段階や発展性についてまとめると、若紫巻では連結し

ていなかった藤壺の懐妊と光源氏の見た夢とが、紅葉賀巻で桐壺帝が若宮の中に光源氏と「同じ光」を察知することによって初めて連結し、藤壺の宿した御子は光源氏の胤であり、その御子はやがて立場し即位するであろうという一つの意味として緊張感をもちながら徐々に鮮明になってゆくことになろう。この点においても『伊勢物語』などの犯しとは異質である。

そして若宮の立場が殆んど決定的である事は、藤壺の立后があり、光源氏が「おほやけごと知り給ふすぢならぬ」源氏ではなく、「大将」として冷泉帝の後見に位置付けられる過程から窺える。ここには桐壺帝の若宮立場への願望の強さが示されると同時に、「参議兼任の大将という史実上日常においてありえぬ官歴」^⑭を経てゆく光源氏が、やはり一般の一世源氏ではない独自性をもつことが示される。

このように、藤壺と光源氏の犯しに皇統譜侵犯への方向を与えるべく機能するのは桐壺帝の強き意志や願望なのである。「機能する」とは敵密に言えば、筋や因果関係を明示しない曖昧な叙述の物語に対峙する読者が、懐妊、夢、桐壺帝の察知という三つの事象を交叉させ一つの意味として、つまり皇統譜侵犯の方向へ読み進めるとき、読者の意識において桐壺帝の察知が確かな指標として機能するといふことである。

そしてこの方向づける力、三つを交叉させる力が、「物語の論理」であり、曖昧な叙述のむこうに脈打つ物語からの要請とそれへの読者の合意によって形成される力であると捉えたい。これは登場人物の個としての心情や意志に還元し尽くせるものではなく、それらを超えて貰かれる。また、その「合意」の核となっているのは桐壺帝が若宮の中に光源氏と「同じ光」を察知したことの意味である。つまり立坊できる資質をもちながらも立坊を断念せざるをえなかったという独自の「一世源氏」光源氏の存在論理が「合意」の核にある。ゆえに「物語の論理」とは即ち光源氏の存在論理を確認してゆく力、過程そのものということができないのではないか。

以上から桐壺朝の特異さの本質と光源氏の存在論理は不即不離のものだといえる。桐壺巻で描かれた光源氏の「ゆゆしき」までの資質が犯しをめぐる紀葉賀巻でも強調されていることもまたそれを証明するものだろう。

三、六条院世界の存在論理

女三宮降嫁が光源氏の方向へ強くたぐり寄せられることは、光源氏が自ら提案した女三宮の冷泉帝後宮への入内案を再び撤回してゆく過程に窺えるのだが、それは光源氏にとって、また六条院世界にとってどのような意味をもつのであろうか。

「源氏物語」にみる物語論理

ここでいう六条院世界とは四方四季の館という物理的空間やそこに過去に交渉した女性たちを配すという構図をさすだけでなく、それらがあるべき状態で機能していること、つまり具体的には宮廷との緊張関係の保持と確固たる政治的基盤のもとに「生活を藝術化し生を美に煉成しようとする事」、「みやびの業」を繰り広げることである。

(1) 秋好中宮と玉鬘の意義

乙女巻で六条院の完成と殆んど同時にもう一人の女として導入される玉鬘、また玉鬘が六条院から退出した後以降嫁してくる女三宮の意義を考えたとき、両者が六条院世界のある方と密接な関係にあり、光源氏の存在論理とも通ずることが予想できる。

そこで、まず六条院世界の養女としての玉鬘の性格を先行する私たちで担っていた秋好中宮について触れる。賢木巻で既に光源氏の秋好中宮への懸想は「癖」の発動として示されていた^⑤。が、これはそのまま男女関係に開かれてゆくものではなかった。光源氏は懸想を秘めながら養い親として、秋好中宮を冷泉帝の「かしづきぐさ」たるべく入内させる。そこには、六条御息所から遺言として後見を依頼されたこと^⑥による懸想への自己規制と、子が少ないという政治的側面での不利を補う意味を含んだ政治的企図への決断がある。さ

らに薄雲巻で二条院に秋頃、里帰りした秋好中宮を「むげの親さま」^⑧でもてなして、「この門ひろげさせ給ひて」明石姫君を「かずまへさせ給へ」と「はかばかしき方の望み」^⑨を依頼しているところに、秋好中宮の政治的側面での位相が際立っている。

しかし、その「はかばかしき方の望み」とは別に、「心のゆく事もし侍りしがな」と、続いて春秋論が持ち出され、しかも秋好中宮が「露(母)のよすが」として秋に心を寄せているところからは、光源氏の望む「心ゆく事」が六条御息所の鎮魂ともかかわっている

「みやびの業」の理念を中心とした六条院構想であることが窺える。また、秋好中宮が宮廷に関与しつつ六条院構想の中軸としての位置を占めてゆくだろうことが予測される。つまり秋好中宮は六条院世界造営の基盤となる冷泉朝を支えてゆくという、六条院世界と冷泉朝の相互の緊張関係そのものを担い象徴する位相にある。乙女巻での御子なくしての秋好中宮の立后はこの位相を補強するためにこそ強行されたといえる。秋好中宮の入内から立后に関する光源氏のあり方は一見、摂関家の策謀を髣髴とさせるようだが、冷泉朝が光源氏と藤壺の犯しにより導き出されたものであることや、「心のゆく事」という六条院構想現実化への光源氏の願いに重点が置かれていることなどからも史実の摂関家のあり方とは異なるといえる。

また、光源氏の色好みのあり方として、「癖」の発動による懸想

が回顧的性質を帯び、激しさを欠き、男女関係に発展していかなくなることは、光源氏の衰退を語るのではなく、六条院構想にふさわしく色好みが変容することを語るものであり、しかも政治的後見という要素も加わってゆくゆえに屈折してゆくのだといえる。この屈折してゆかざるをえなかった懸想をあらたに「みやびの業」の中に発展させるべく六条院世界に玉鬘が導入されるといえるがやはり政治的役割も結果的に担わされるわけで、玉鬘は「みやびの業」と政治的側面との両面での「くさはひ」であった。

玉鬘の政治的役割は、まず尚侍就任に示される。これは朧月夜尚侍との併任であり、

「尚侍のもつ皇妃的でありながら皇妃でない性質を利用して、内大臣側の弘徽殿女御とも、又源氏自身が後見する秋好中宮とも真向からは対立しない立場に立たせて、冷泉帝後宮への布石とする一方、求婚者達の手だしは封じて自分自らの為には余裕を残しておこうとする無上の策」^⑩

であった。いわば「みやびの業」を経たことによって生み出された、或いはその限界点と政治的企図との接点に生み出された尚侍就任である。それは若菜巻で光源氏が柏木と密会していた女三宮を玉鬘と比較して、玉鬘の出自がたい良くなかったことは「くさはひ」として扱いやすくする条件であったこと、玉鬘に才気があったこと、

自分の懸想に対して全く拒絶するのではなく、かといって全く靡いてしまうのでもなく、実に穏やかにふるまったことなどの点を「みやびの業」を解する素質として、また女の身の処し方の手本として評価すること^⑧からも窺えるだろう。

また玉鬘は最終的に光源氏の手想外のところで髡黒の正妻となるが、若菜巻で玉鬘が光源氏を生みの親である内大臣以上に敬愛する様子から、「血縁関係上では頭中将側に牽引されるはずの髡黒が光源氏の権勢下にひきよせられる仕組み」が見られ、玉鬘が六条院退出後にも、六条院世界の政治的基盤の補強に機能し続けていることがわかる。

この玉鬘が光源氏の権勢側につく原因の中で、より光源氏の政治的企図として考えられる点がある。それは養女玉鬘が実は内大臣の娘であったという素姓を内大臣にうちあけて蒙着式の腰結を依頼し、しかもその時点では尚侍出仕の意向をまだ内大臣には告げない、というように「玉鬘の父権が源氏にあり、内大臣もそれを認めているということ」を天下に公にした^⑨。上で玉鬘を自由に扱ってゆける関係が生み出される点である。血縁を無視した仮構の父娘関係を有効なものとして公認させているのである。玉鬘をめぐっての「みやびの業」と政治的企図が複合している様相と共に、仮構を有効なものとして価値転換してゆく点を六条院世界の独自性だと捉えうる。

『源氏物語』にみる物語論理

このように六条院の養女は光源氏の色好みの変容と六条院世界の政治的基盤の補強から要請されている。

(2) 女三宮との婚儀

女三宮降嫁の時点において、(1)で述べた要請はみごとに結実している。つまり六条院世界は冷泉朝の権威と次代の国母となろう明石姫君の存在、そして明石姫君の最大の後見的存在となるべき夕霧と髡黒の連繋の体制などの確固たる政治的基盤の上にあること^⑩から、栄華は藤裏葉巻大団円の延長線上にゆるぎなく極まっている。

また「宮中以上の芸道水準を誇り得るかのよう」であることが「女楽」をめぐって示され、「最高度の〈文明性〉を発顕し得る〈世界〉の中心点としての、朝廷を越える実質的権威^⑪」は六条院世界の独自の存在論理であろう。

常に宮廷を支え、支えられるという相互の緊張関係を持っており、実質的にその権威や文明性は宮廷を凌ぐにもかかわらず遂に宮廷、皇系そのものではありえない世界が六条院世界なのであり、この両義性の中にむしろ独自の輝きを増すのである。このあり方はまさに、光源氏の存在論理と合致した六条院世界の存在論理だといえる。

この存在論理は女三宮降嫁の過程に貫かれ、光源氏と女三宮の婚儀の形態の特異さにも表われる。つまり準太上帝と内親王の婚儀は、

女三宮の六条院入りの儀が入内の形態に基づいている一方、準太上帝の光源氏はあくまで臣下として処したということや、またこのことと逆に、完全に女御入内の様式に従って光源氏が「昼の通い」をしたことなどに「めづらしき御中のあはひども」として描かれている。ここに、臣下でありつつ超越的な資質を有する独自の「二世源氏」の存在論理が捉えられ、また両者の結合の比類なき輝かしさは宮廷と緊張関係を保持し続けるべくある六条院世界の存在論理にもかかったものである。

女三宮の冷泉帝後宮への入内案は

「冷泉帝という源氏の血の流れを受ける皇系そのものが、女三宮という他の皇系を自己の側に吸収することにより、自己の皇系の拡大存続を図るというあり方を意味する」^⑧

はずだが、その入内案を光源氏自ら撤回することは、光源氏をそして六条院世界を皇系そのものではなく、その周囲に緊張関係を持つ存在として位置づけることを意味する。換言すれば、それは臣籍降下、冷泉帝譲位の意向を辞退したことなどに象徴的であった独自の「一世源氏」の存在論理が、また六条院世界の存在論理が確認されるということである。

『源氏物語』がこだわり続けるのは、比類なき栄華や準太上帝という位でもなく、また帝位そのものや「他の皇系の吸収」なのでも

ない。また一、(2)で、光源氏の優越性の確認と相関的に朱雀院の弱体性の確認がなされる過程を論じたように、

「六条院源氏は最早世俗の場において完全に相対化され、『皇系の芯』から永遠に隔絶し『皇系をとりまく立場』に自己を相対的に位置づける段階に至った」^⑨

として「虚弱で不完全」な朱雀朝が「選ぶ者」の絶対性」に転換すると捉えるべきではない。

ただ、女三宮との婚儀は葵上とのそれ以来の正式な婚姻であり、光源氏が正妻を欲したとはいいがたいにもかかわらず、結果的に女三宮を正妻とするに至ったことには別の問題が孕まれている。つまり、ここに光源氏にとって本来的ではない世俗的秩序や世俗的価値観がもち込まれている問題である。光源氏と女三宮が登場しないまま、両者が概念として左中弁や乳母の間で話題とされ、「準太上帝光源氏にふさわしい身分の方が正妻としておいでにならない」という世俗的価値観による光源氏評や六条院世界評がうち出されてくる状況が一方にある。

光源氏の存在論理にかなっているはずの女三宮との結合が正式な婚儀を必須とし、結果的に世俗的価値観に沿うことにもなっているというあやにくさについては容易に論じてしまえない。がこれは、女三宮という存在の本質、とりわけ血縁の面で「紫のゆかり」では

あるが実態は「片なり」であるという問題と関連するだろう。ここに「物語の論理」自体が必然的なものとしてくる主題性の質転換（一部世界からの暗転という単純なものではない）を予測しておきたい。

四、「物語の論理」——まともに代えて

女三宮が光源氏へ降嫁する原因はやはり若菜巻の文脈を精緻に分析しても見出しがたいだろう。また、須磨流謫、藤壺との犯しという物語の主軸部分にはかえって曖昧な表現が目立ち、作中人物の個性や心情にその物語展開の原因を求め尽くせぬ不透明さが若菜巻同様に横たわっていた。しかしその不透明さを支えて一つの方向に向かわせる力が働くことも確かであり、その力を「物語の論理」と捉えた。それは桐壺巻以来の独自の「一世源氏」光源氏の存在論理を確認してゆく力であり、（相関的に朱雀院の弱体性を確認する）、女三宮降嫁もこの力によって展開する（物語の奥深くからの要請に応えるべく読者に読まれる）のである。

さらにいえば「物語の論理」とは『源氏物語』の作者自身も明確に認識しているとはいきれぬ物語という虚構世界の生命、自律性という意味で「物語の意志」ともいえよう。『源氏物語』は確かに随所に当代的リアリティを持ちえており、それが文字として有機的

『源氏物語』にみる物語論理

に機能している。また螢の巻の物語論においてもそれは認められ、^⑧ 子女の読みものと定義する中にこそ、かえって物語文学への作者の矜持さえ感じられる。しかし単なるリアリティを超えた独自の王朝、尚侍、「一世源氏」の造型を総合的に捉えたとき、果して作者は現実を捉え直すただけにこの物語を創造したのかどうかという、紫式部の虚構意識、創造への情動と目的に深い疑問が湧く。

『紫式部日記』や『紫式部集』には宮仕え生活の中で栄華世界に魅了される自己とそこに浸り込めぬ自己との葛藤を克明に認識していたことが窺えるし、それは紫式部の物語創造に強く影響するであろうことも否めない。今、全て結論するには力が及ばぬが、その現実や自己への認識は直接的或いは全面的に、現実批判のための物語文学創造として影響したのではないだろうと予測しうる。

より本来的な『源氏物語』の姿、より正確な作者の創造への情動と目的を明らかにし、両者の可能性と限界性を問うための手がかりとして「物語の論理」を提示したい。

引用論文中の圏点はすべて松田による。

尚、『源氏物語』本文はすべて岩波古典文学大系源氏物語全五巻による。

注① 杉山康彦「源氏物語の語り主体」『散文表現の機構』所収

② 石津はるみ氏「若菜への出発——源氏物語の転換点」『国語と国文学

S 49・11

- ③ 角田文衛氏『日本の後宮』及び玉井力氏『女御・更衣制度の成立』名古屋大学文学部研究論集史学19を参照した。
- ④ 注②に同じ。
- ⑤ 冬嗣—良房—基経の嫡流と、魚名や良門などの傍流との抗争が激しい。
- ⑥ 山口博氏『玉朝歌壇の研究 宇多醍醐朱雀朝篇』所収。第三章後宮の歌壇 p 63より。
- ⑦ 山本信吉氏『冷泉朝における小野宮家・九条家をめぐって—安和の変の周辺—』 p 128より 古代学協会『撰関時代史の研究』所収。
- ⑧ 注②に同じ。
- ⑨ 石津はるみ氏は桐壺巻にいう「先帝」をも含めて五代王朝を問題にされたが拙稿ではそれを除いた四代王朝を扱う。
- ⑩ 第二巻 p 284 乙女巻。
- ⑪ 第三巻 p 327 若菜下巻「故なくてあながちにかく、しおき給へる御心」とある。
- ⑫ 便宜上こゝ表記しておく。又、立後の叙述はないがおそらく御法巻あたりであったらうと推測される。
- ⑬ 今井源衛氏『撰関制度の進展—年代設定の方法をめぐって—』解釈と鑑賞 S 34・4
- ⑭ 秋山虔氏『源氏物語の後宮世界』解釈と鑑賞 S 34・4
- ⑮ 清水好子氏『源氏物語論』所収 第七章源氏物語執筆の意義 p 272より注②に同じ。
- ⑯ 後藤祥子氏『尚侍放—朧月夜と玉鬘をめぐって』日本女子大学国語国文学論究 S 42・5及び角田文衛氏『日本の後宮』を参照し、両論をまとめ①④に区分した。

- ⑬ 穩子立后以来、中宮—皇后であったものが一条朝の定子入内以来区別されるようになり、さらに彰子入内により定子皇后宮、彰子中宮ともにも一条帝の嫡妻であり身分上差別なしという一帝二后併立の新例が成されるに至った。これはその背後の藤原氏の策動を示すものだが、『源氏物語』においては中宮—皇后という概念があることを注意しておきたい。ゆえに又、尚侍も完全に道長の段階の意味ではないといえる。(富田節子氏『平安時代中期における立后事情と外戚関係』日本女子大学記要文学 8を参照した)
- ⑭ 道長娘、妍子の寛弘元年の尚侍就任、寛弘八年の女御昇進は史上初の例。
- ⑮ 後藤祥子氏『尚侍放—朧月夜と玉鬘をめぐって』日本女子大学国語国文学論究 S 42・5。
- ⑯ 注②に同じ。
- ⑰ 後藤祥子氏『語らひ』の功用性』国文学 S 47・12。
- ⑱ 鈴木日出男氏『光源氏の須磨流論をめぐって—『源氏物語』の構造と表現—』文学 S 53・7。
- ⑳ 第一巻 p 395 賢木巻。
- ㉑ 第二巻 p 37 須磨巻、女御や更衣ではなく「おはやけさまの官仕へ」としている。
- ㉒ 第二巻 p 79 須磨巻、又、朱雀帝は故桐壺院にいらまれ眼を病んでい
- ㉓ 坂上けい氏『朱雀院の役割』国語・国文学 S 36・5。
- ㉔ 第二巻 p 103 濤標巻、又第二巻 p 79 須磨巻では理由もわからず病気になっている。
- ㉕ 第二巻 p 102 濤標巻。
- ㉖ 故桐壺院の霊の問題は残る。

- ①②に同じ。
- ③④ 宇多帝などが代表的例である。物語ではそのことを冷泉帝が光源氏に譲位の意向を告げる時に引いている。
- ⑤⑥ 玉井力氏「女御・更衣制度の成立」名古屋大学文学部研究論集史学19より要約した。嵯峨朝における女御・更衣制度と源氏賜姓の相關関係説かれている。
- ⑦⑧ 嵯峨朝における妃、夫人、嬪以下のものを「キサキ」としている。
- ⑨⑩ 村井康彦氏「一世の源氏が主人公になったのはなぜか」国文学S55・5。
- ⑪⑫ 大系本で山岸徳平氏が「おほやけのかため」を「撰閑家のごときを指す」と注しているのに「一応従った。
- ⑬⑭ 第一巻P28「わたくし物におぼしくしかつくこと限りなし」とある。注⑮に同じ。
- ⑮⑯ 秋山虔氏「光源氏論」『王朝女流文学の世界』所収。
- ⑰⑱ 注⑲に同じ。要約した。
- ⑲⑳ 注㉑に同じ。尚、平安期に家父長制的姦通罪の觀念が成立していたとはいえないので、光源氏と藤壺の犯しを「不義」或いは「密通」と捉えることは適当ではない。(高群逸枝氏『招婿婚の研究』)所収第六章第九節前婚取期の姦通売淫等を参照している)従って本拙稿では、「犯し」と捉えておく。
- ㉑⑳ 参照のこと。
- ㉒㉓ 清水好子氏「光源氏論」国語と国文学S54・8
- ㉔㉕ 永井和子氏「藤壺物語の一視点——冷泉帝の出生をめぐって」国語国文論集第9号学習院女子短期大学国語国文学会。
- ㉖㉗ 注㉘に同じ。
- ㉘㉙ 注㉚に同じ。

『源氏物語』にみる物語論理

- ㉚㉛ 第一巻P284紅葉賀巻。
- ㉜㉝ 第一巻P285紅葉賀巻。
- ㉞㉟ 今西祐一郎氏「罪意識の基底——源氏物語の密通をめぐって——」国語と国文学S48・5。
- ㊱㊲ 注㊳に同じ。
- ㊳㊴ 藤井貞和氏「神話の論理と物語の論理——源氏物語廻行」日本文学S48・10。
- ㊵㊶ 尚、拙稿で論じている「物語の論理」は藤井氏の述べる人物の「相似性」の確認を意味するだけではない。
- ㊷㊸ 第一巻P317葵巻。
- ㊹㊺ 神野志隆光氏「光源氏官歴の問題——『納言』をめぐって——」古代文化Vol.28・276
- ㊻㊼ 岡崎義恵氏「季節感の展開」『美の伝統』所収。
- ㊽㊾ 第一巻P374、393賢木巻。
- ㊿㊰ 第二巻P124、126、128、129落標巻。
- ㊱㊲ 第二巻P125六条御息所は「さやうの世づいたるすぢにおぼしよるな」と言い遺している。
- ㊳㊴ 高橋亨氏「可能態の物語の構造」日本文学S48・10を参考にしてゐる。
- ㊵㊶ 第二巻P239薄雲巻。
- ㊷㊸ 第二巻P242薄雲巻。
- ㊹㊺ 小町谷照彦氏「詩的言語と虚構」国文学S45・5を参考にしてゐる。
- ㊻㊼ 朝顔巻で朝顔齋院にも迫り切ることをしてしないなど。
- ㊽㊾ 注㊿に同じ。
- ㊿㊰ 第三巻P400若菜下巻。
- ㊱㊲ 出仕後に「女の御心ばへはこの君をなむ本にすべき」と言っている。

『源氏物語』にみる物語論理

第三卷 P 114 藤袴卷。

⑥⑧ 河内山清彦氏「明石女御の皇子誕生をめぐって(上)」平安文学研究第

59 輯 S 53・6。

⑥⑦ 吉岡曠氏「玉鬘物語論」『源氏物語とその周辺第二輯』所収。

⑥⑧ 注⑥を参考に行っている。

⑥⑩ 深沢三千男氏「光源氏像の形成序説」『源氏物語の形成』所収。

⑦⑩ 第三卷 P 246 若菜上卷。

⑦① 第三卷 P 255 若菜上卷。

⑦② 注②に同じ。

⑦③ 注②に同じ。

⑦④ 第三卷 P 222 若菜上卷。

⑦⑤ 南波浩先生「紫式部」『日本の思想』所収を参考に行っている。

〈附記〉 本拙稿は修士論文(80年度修了)の一部を改稿したもの

である。